

2-12		主題	認知症ケアにおける環境を、ハード・ソフト両面から考える	
認知症ケアの環境		副題	真に利用者が安心できる環境とは	
研究期間	96ヶ月	事業所	特別養護老人ホーム 文京くすのきの郷	
発表者：竹本 正樹（たけもと まさき）		アドバイザー：西方 房江（にししかた ふさえ）		
共同研究者：				
電話	03-3947-2801	メール		
FAX	03-3947-6346	URL		
今回発表の事業所やサービスの紹介	<p>1992年4月開設の、特別養護老人ホーム。施設入所者100名、ショートステイ8名対応。3フロアからなる広い建物で、作りが回廊式の為に居室・ディルームと食堂が離れている環境。</p> <p>この中での認知症対応フロア（入所者29名、ショートステイ3名）が、研究対象フロアとなっている。</p>			
<p>《研究前の状況と課題》</p> <p>1、 食堂と居室側という、中庭をはさんでのフロアの環境の中で、死角になる部分が多く存在し利用者の安全が守りにくい。</p> <p>また、介護保険後に人員減の状況に陥ってしまい、3大介護のみで1日が終わってしまう。いつもそばにいてほしい、と願っている利用者の気持ちに答えられない。</p> <p>2、 食事が進まず、介助にも拒否を示される利用者が見られる。</p> <p>3、 夜間熟睡できず、起き出してこられる利用者がみられる。</p> <p>上記が、未解決の課題として常在している状況であった。</p>		<p>《研究の目標と期待する成果》</p> <p>1、 そばにいて欲しいと願う利用者に寄り添える時間を作り、不安感を安心感に変える。</p> <p>2、 食事に集中して、自力での摂取が出来るようになる。</p> <p>3、 夜間安眠できるようになる。</p> <p>上記の成果を得られる事を期待し、利用者を取り巻く環境面からのアプローチを試みた。</p>		

《具体的な取り組みの内容》

- 1、 2002年、グループホームやユニットケアの情報が入ってくるようになり、特養の中においても行うことは出来ないだろうかと考え、取り組みをスタートした。
  - 食事場所を食堂ではなく、より居室に近いディールーム側に近づけて、ユニットの状態にし、利用者のそばに寄り添える環境を作り、利用者の声にきちんと向き合う努力を行ってきた。
  - 利用者の有する能力を毎日継続する努力（エレクトーンの演奏・日常の洗物や洗濯を干したり、たたんだり）。利用者同士が寄り添う事で、癒し癒されるよう働きかけを行った。
  - 2005年、施設全体の改装時に、ユニットケアに焦点を当てる。その中で、ルーフバルコニーのガーデニング、ブライトケアの設置を行なった。
  - 2006年、アニマルセラピーの観点と、言葉は通じずとも心が通じ合う事を職員が学ぶ為に、介護犬ピニーを迎え入れた。
- 2、 食事が進まない利用者については、その原因追及を行ない、静かな食事環境を作る事を試みた。
- 3、 夜間眠れない利用者については、日中の活性化に繋がるよう活動の場所を考え、朝食から午前中までの時間をなるべくブライトケアの下で過ごしていただくようにし、そこでグループワーク・個別の援助を行なった。

《取り組みの結果と評価》

- 1、 昼食の時間を中心に寄り添える時間を作る事ができ、食事中に落ち着きなく歩き回っていた利用者が席について食事を摂られたりと、成果がみられる事となった。
  - 2005年の改装後は、ルーフガーデンにすぐに出られる環境が開放感を感じさせたり、介護犬が温かく心を癒してくれたり、利用者の情緒の安定の一助となっている。
  - また、ユニットに近い環境を作り出す事によって死角が減り、利用者の安全を守る事に繋がった。
  - きちんと向き合う対応により、帰宅願望がある方でも激しく出ることが目立たなくなった。有する能力の継続を行ってきている方は、ADLの低下がとても緩やか。
- 2、 静かな環境にする事で食事に集中でき、自身で全く食事が進まなかった利用者が自力摂取できるようになったり、介助に拒否を示された利用者が「おいしい、おいしい」と全量召し上がるようになった。
- 3、 日中の活性化が生活リズムの構築に繋がりと、夜間何度も起きてこられた利用者が、安眠できる日が増えた。

《まとめ》

2002年から取り組みをスタートし約96ヶ月、その時々利用者に合わせて環境を変化させてきました。利用者はいつも同じ状態にあるわけではないので、その時必要とされる環境を状態に合わせてスピーディー且つタイムリーに変化させていく努力が、日々スタッフに要求されています。

それと同時に、環境は場所や物の配置の工夫といった事も重要ですが、それ以上にスタッフの言動や行動が大切であり、スタッフひとりひとりがかもしだす雰囲気、何よりも環境を決定付けるものであると、あらためて感じています。

《提案と発信》

日々利用者の状態に合わせた環境作りに取り組んでいますが、入所時期の高齢化・重度化もあり、スタッフひとりひとりがかなり意識を強く持ち、日々のケアを行ない、アセスメントについて時期を逃さずに行なわないと対応は遅れ、利用者に向き合うことも出来ず、走り回って一日が終わってしまう事になります。  
スタッフが落ち着いて介助できず、寄り添うことも出来ない環境の中では、たちまち利用者は不安になってしまいます。利用者は私達スタッフの心の鏡とも言えます。  
今要求されるのは、スタッフの教育の重要性であると痛感しつつ、その時間を作り出せない事にジレンマを抱えています。

【メモ欄】 追加資料 有 無

注：参加者が自由に記入できるスペースです。空欄のまま提出下さい。